

マルチパン Marzipan

2018年3月10日に九州大学文学部独文学研究室で、リューベック大学教授ハンス・ヴィスキルヘン氏を招待して、「トーマス・マンと日本」と題する特別講演が行われた。ヴィスキルヘンさんはドイツ・トーマス・マン研究会の会長である。「トーマス・マンと日本」という題は、戦中、戦後に日本の高校生たちやドイツ文学愛好者達が、ナチスへの抵抗と平和を訴えた筋金入りの文筆家トーマス・マンの思想に魅せられて、その文学に親しんだ歴史があるからである。トーマス・マンの奥さんのご兄弟が日本に住んでいたこともあったと言う。

2017年に私たちは水戸市郊外の画廊シエルで家内周（チカ）の父、高橋義孝の回顧展を催した。展示物には義父に宛てられた谷崎潤一郎、川端康成、志賀直哉、内田百閒、尾崎士郎、入江相政、福田恒存ら文士たちの書簡や書があった。また相撲協会の横綱審議委員長を10年間勤めていた関係の展示品、能・謡の趣味に関するもの、東京駅の「一日駅長」の記念品などもあった。

しかし何といても展示の中心は、独文学者である義父と交友関係があったトーマス・マンの書簡であった。回顧展を行う前に広島大学ドイツ文学の佐藤正樹教授にも伝えたところ、周の長兄鷹志から佐藤教授に贈呈されていたトーマス・マンの書簡数通が水戸へ送られてきた。回顧展終了後に佐藤先生に送り返すと、佐藤先生としても広島大学としても、永久保管は難しいだろうという返事を添えて送り返されてきた。

書簡のいくつかはエアメールでありタイプで打たれていたが、手書きのものがあった。それには

「私のフロイト論に関する論文についての、あなたの繊細で賢明な研究に感謝します。この論文で知的に有用な点、それについて欠けている点と矛盾する点について、私も承知しています。そう言うこともあります。『人が何かを言った途端に、人は過ちを冒し始める』（ゲーテ）。フロイトは最初の論文にそれほど賛成してはいませんでした。それは言わば、彼にとってと言うよりもロマンに関する一つの試みであったと彼は考えています。しかし、第二の点、祝辞について、彼は極めて適している（angetan）」（佐藤正樹訳）

と書いてある。この手紙は1954年5月17日付けであり、トーマス・マンが冠動脈血栓症で亡くなる一年前のことである。

トーマス・マンの書簡の散逸を恐れて、インターネットを通じて最適の保管場所を探していると、九州大学文学部独文学の小黒康正教授にたどり着いた。そもそも義父は20年ほど九大の教授であった。しかも小黒教授は現在の日本トーマス・マン研究会の会長である。メールを送ると小黒先生から歓迎の意を示されたのみならず、ヴィスキルヘン教授の講演に合わせて私たちが招待されることに

なった。

会場では九大の文学部長、図書館長らにも紹介され、九州一円のドイツ文学者の集まりの中で書簡の贈呈式が行われ、感謝状を贈られた。周は博多のNHKの咄嗟の取材に応じて、永久保存に対する喜びと感謝の言葉を述べ、その状況が当日も翌日もテレビで繰り返し放送された。講演会の席で軽食を取りながら歓談していた時に周に向かって「お母さん」と言うと、そばに居合わせた女性独文学者が、そんなに可笑しかったのか「ぷっと」吹きだした。

翌11日には、小黑教授と九大言語文化研究院でトーマス・マン研究をしておられる福元圭太教授とのお二人が、ヴィスキルヘン教授を唐津に案内するように計画してあった。周の希望で私たちも同行することになり、唐津城を見学し、城内の高樓から海を眺め、また展示物を見学した。その後で海浜の料亭に行き、珍しい烏賊料理を味わいながら歓談することができた。福元先生はヴィスキルヘンさんの著書 *Zeitgeschichte im Roman* を翻訳中らしい。席上でオーストリーの作家マリー・フォン・エーブナー・エッセンバッハの「男は一家の主であるが、家の中では女だけが支配する」という言葉を引用すると、ヴィスキルヘンさんも「うちでもそうです」と言って笑った。

唐津から福岡へ帰るときに唐津駅まで乗ったタクシーが、駅の縁石ぎりぎりに止まり、丁度足一本が入る間隔があった。タクシーから下りる時にその隙間に左足が挟まって、身動きが取れなくなった。ヴィスキルヘンさんがそれを目ざとく見つけ、駆け寄って私の左脇に肩を入れて引っ張り上げて下さった。咄嗟にそういう行動にでることができる優しいお人柄である。

周はどなたかに贈るつもりで夫婦用の漆塗りの箸を用意してきたが、それをヴィスキルヘンさんに贈った。そのお返しの様にリュベック市の象徴とされるホルステン門を象ったマルチパンの菓子を戴いた。リュベック市の名物らしい。

この菓子は我が家の居間の壁に長い間かけられていた。煉瓦作りのホルステン門の上部には、ラテン語で *CONCORDIA DOMI FORIS PAX* (内に結束、外に平和を) と書かれているそうである。

家内はチョコレートと思い込んでいて、夏がくると溶けてしまうからその前に食べたいと言ったが、記念だからと言っていつも抑えて来た。ある日気が付くといつの間にかその菓子が無い。「食べて見たら美味しくはなかった」と周はけろりと言ったが、後の祭りである。これはドイツではマルチパンと言ひ、日本ではマジパンと言われるもので、アーモンドと砂糖をまぜて練ったものである。

ヴィスキルヘン教授は30歳そこそこで「小説にみる現代史」*Zeitgeschichte im Roman* という本を書いた碩学である。その本を買って読んで見たが、語彙が乏しいのでしょっちゅう辞書を引かなければ読めない。ドイツ語では二つの名

刺を繋げた語が多く、Zeitgeschichte も英語にすれば time history である。まず「時の歴史」と言われてもびんと来ない。仕方なく辞書を引いてみると、現代史と言う意味であった。しかしまた分からない単語が次々と出てくる。辞書と首っ引きで読んでいては文脈も捉えられず、寝床の近くの棚に積み重ねておいた。

或る夜、眠れないままに見回すとその本に目がとまった。寝床の中で読んで見ると、ゲオルク・ジンメル文化哲学からトーマス・マンに至る解説など、不思議な面白さがある。

トーマス・マンはノーベル賞作家であるだけでなく、ナチスに逆らい続けて家財は没収、国籍は剥奪されてアメリカに亡命した平和主義者である。「私のいる所、それがドイツである」と言った気概を持っていた。アメリカで録音した音声をロンドンに送り、BBC ラジオ放送を通して「ドイツ国民に告ぐ！」と呼びかけ、ナチスへの不服従を求め続けたことは有名である。

中山宗春